M・M・ソコロフ

『社会主義農業経済学』

モスクワ国立政治文献出版所一九六二年刊、二五六頁

M. M. Соколов Экономика Социалистического Сельского Хозяйства. стр 256. Госполитиздат, Москва 1962.

丸　毛　忍

（一）

モスクワのチミリヤーゼフ農科大学のローザ学長に「何かいい農業経済学の本はないか」うかがったら、M・M・ソコロフ氏のこの本を教えて下さった。著者は同農科大学でながく農業経済学の講座を担当していた人、昨年他に転じたときいた。

本書は大学の経済学部の学生のための参考書として書かれたもので、きわめて包括的な内容をもち、農業問題とそのソ連における解決、社会主義農業経営方式、各農業部門の経済、の三部、二六章から構成されている。

目次の要点を示せば、次のとおり。

1　農業経済学の対象と講義の内容

第一部、農業問題とそのソ連における解決（2農業問題、その本質と意義、3十月革命とロシアにおける農業問題の解決、4レーニンの協同組合計画）

第二部、社会主義農業経営方式（5ソフホース、6農業アルテリ、7生産の管理、8農業の計画化、9農業の配置と専門化、10土地利用と社会主義下の農耕方式、11社会主義農業の技術的基礎、12労働組織と支払、13農業における労働生産性、14農産物の原価、15独立採算と収益、16社会主義的拡張再生産、17農産物の実現、18社会主義農業における価格形成と価格、19農業における総生産物の分配）。

第三部、各農業部門の経済（20穀作の経済、21棉花栽培の経済、22亜麻・大麻栽培の経済、23てんさい生産の経済、24じゃがいもの野菜生産の経済、25果樹栽培の経済、26畜産および飼料生産の経済）。

序文によると、「二十年間で共産主義の物質的技術的基礎をつくりあげる」というソ連共産党の綱領が、本書執筆の際にも著者の問題意識の背後にあり、綱領の実現に役立つ知識の提供が本書の課題だという。

M・M・ソコロフ氏は農業経済学を定義して、「農業経済学は、農業における社会主義の経済法則発現の諸形態および、最小の生産費で単位面積当り最大量の生産物を得るためこれらの

法則を利用する諸方法を、研究する科学である」（八頁）とのべ、さらに「農業経済学は実践と緊密に結びついて発展する。したがって、先駆的経験の研究と一般化は農業経済学の課題の一つである。これは共産主義社会の展開せる建設期には特に重要な意義をもつ」（同頁）とつけ足している。彼によれば、農業経済学はたんに農業における経済法則の解明だけに終らず、進んでこれらの法則の有効な利用、先駆的経験の一般化を計るという、極めて実践的な課題をもっているわけになる。社会主義社会において、農業経済学がそのような性格をもつのはけだし当然かもしれない。

したがって、ソ連の農業経済学の教科書は、M・M・ソコロフ氏のこの本にかぎらず、常に実践的な要求に答える見地から書かれており、その点には敬意を表するが、理論的な側面がお粗末になりやすく、ために、実践的な問題解決の指針としても活き活きとしたものをもたず、全体として安価な実用主義におちこんでいる場合が多い。制度や法令規則、ないし農業生産の表面的な動向についての解説が主となり、経済理論らしい経済理論かそこに見出されないのである。高度の実践的要求をもつ教科書の理論的説明のための例解が、実際のソ連農業についての数字を用いた具体的分析をつうしてなされず、概念的な記述、架空の数字を用いて処理されていることが多いのは、いつも疑問に思うことの一つだ。もちろん、理論的にも実践的にも役立つような本を書くのはとてもむづかしいことたし、また、ソ連の農業経済学の歴史や水準といった問題をぬきにして論評することはできないが、M・M・ソコロフ氏の本もやはりそのような欠陥から免れていない。

M・M・ソコロフ氏は「農業経済学は農業における社会主義の経済法則を研究する科学である」といいながら、法則そのものについては何も論していない。法則の利用にとって重要とみられる計画と価値法則との関連についても、「今日、計画化において投資効率の向上、固定フォンドと流動フォンドの合理的利用、および独立採算制、収益、価格、利潤の諸範疇の完全な利用が特別の意義をもつ」（六頁）ことを指摘しているにとどまる。また、彼が最小生産費による最大生産量の達成という場合の最小生産費にしても、一体、資本主義の場合とどう違うのか、その後の行論をつうしてもあまり明らかでない。

M・M・ソコロフ氏は、本書のなかで彼の理論を展開する場合、マルクスやレーニンからの引用はある程度行なっているが、マルクスやレーニンは、社会主義農業についてまとまった構想や理論の展開は示していないのだから、ブルジョア農業経済学の古典からマルクス、レーニンの基本的な考え方にもとづいて、当然多くの学問的遺産を批判的に摂取しつつ、社会主義農業の

現実から理論的概括を行なっていく必要があるとみられるのに、そういう形での理論展開は全く行なっていない。

モスクワの書店では、外国の農業経済学の古典は、露訳本もふくめて、全くみることができないが、彼がケネー、チューネン、エーレンボー、チヤーノフあるいはカウツキーなどを読んでいないとは考えられないし、また John D. Black and others, Farm management の飜訳は一九五七年に出版されているから、こうした先人たちの理論と対決しながら、彼の社会主義農業経済学の理論を展開してくれたら、よほど問題がすっきりすると思う。そこに僕たちのソ連の農業経済学のあり方にたいする不満があるが、ソ連の学界には僕たちに解らない特殊な事情がいろいろあることたろうし、学者の問題意識もちがっていようから、差当ってそこまで要求するのは、こちらの手前勝手かもしれない。

だが、そこらにソ連の農業経済学の教科書か、制度や法律か変更になるとすぐ役に立たぬものになってしまい、古典的な価値をもち得ない一つの理由があるとみられる。また、ソコロフ氏は、社会主義農業経済学を一個の理論経済学と考えているようであるが、上記の編別構成をみると、他の学者たちの書いている農業経営学の教科書と実際の内容についてはあまり大きな差か見出せないような気かする。ソ連の農業専門学校（ソ連の大学には農学部はない）の経済学科には農業経済学と農業経営学との講座が別々に設けられているが、いずれも実践的な性格がつよいたけに、講義の内容はそれそれの独自性を欠いているのではないか。農業政策学、農業経済学、農業経営学の対象や範囲、方法なとの性格かお互にはっきりしないのは、ソ連だけではないかもしれないが。

（二）

以上にのべたようなソコロフ氏の教科書の性格からして、個別的な問題についても、われわれの見地からすれば、いろいろ喰い足りない点が多いが、その二、三にふれておく。

資本主義を対象とするマルクシストの農業経済学は、地代論を中心とし、ほとんどこの解明に終始しているものが多い。土地が国有となっているソ連の農業経済学では、当然、地代論は中心ではあり得ないが、本書は地代について特別の章を設けていないのはいいとしても、社会主義農業の特徴として、①土地の特殊な役割、②生産期間と労働期間との不一致、③協同組合的集団的所有形態の三つをあけながら（六―八頁）土地利用、生産物実現、価格、生産物の分配などの諸章で差額地代論的な視点から全く問題をとりあげていないのはどうであろうか。また、今日ソ連農業におけるもっとも重要な問題の一つである投

資効率論の吟味を避けているのは理解しがたい。

コルホーズ、ソフホーズの経営方式を論じながら、どこの研究所を訪ねてもその研究に特別力を入れている適性規模論に及ばないのも、今日の問題点をぬかしている感じである。

「コルホーズではソフホーズと違い、総収入、純収入という概念を用いていない」（一七九頁）といいながら、コルホーズの独立採算制や収益がソフホーズと一緒くたに論じられている（一五一～一五三頁）のは、コルホーズとソフホーズとの社会経済的な性格、生産力の水準の違いの問題をあいまいにしている。

農産物の価格やコルホーズ農民の労働報酬を取り扱った章で、実際の数字を用いて説明がなされ、また、たとえば、工業部門の生産物の価格形成および工場労働者の賃金と対比する形で行論がすすめられていたら、ソ連の社会主義社会における農業や農民の地位は一層明らかになったはずである。ソ連では農業労働を機械化、化学化をつうじて「工業労働の一変種」に変化させることはしばしば論じられるが、農民と工場労働者の所得の比較、両者の均衡化を計ることは問題とはなっていない。これでは社会主義農業の特質は解りにくいのではなかろうか。

この問題と関連して、ソ連の農業においていまなお大きな意義と役割をもつコルホーズ農民およびソフホーズの労働者、勤務員の個人副業経営が無視されているのは、全く解らない。評者はこの問題の解明なしにはソ連農業の本質は理解されないと信じている。

本書の第三部各農業部門の経済は、それぞれの部門の経済構造のスケッチであり、簡潔にまとまっている。

いろいろ勝手な注文をつけたが、教科書としての制約もありソ連の社会科学のおかれている条件、その農業経済学の歴史的な性格などを考慮すれば、あまり躁急に多くのことを望むのは無理であろう。それはソ連の農業経済学者にたいする敬意と友情を欠くことになるかも知れない。

見方をかえれば、本書は比較的短かい紙幅のなかに多数の問題を盛り込みながら、叙述は明快にして要領を得ており、本書を一読するならば、ソ連農業の諸制度、農業生産の構造的な特徴についてかなりまとまった知識が得られると思う。そうした意味ではハンディで便利な本である。